SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

活きる

１９９４年・中国映画・１３１分
配給／角川書店、ドラゴン・フィルム

２００３（平成１５）年3月１日鑑賞
２００４（平成１６）年7月１５日鑑賞
<シネ・ヌーヴォ・中国映画の全貌２００４>

Data
監督：張藝謀（チャン・イーモウ）
出演：葛優（グォ・ヨウ）／鞏俐（コン・リー）

みどころ

１９４０年代から６０年代にかけての近代中国の激動の時代を懸命に生きていく庶民の姿が実によく描かれた１９９４年の作品。９４年カンヌ映画祭審査員グランプリ受賞も当然か。毛沢東の時代をはじめとする近代中国史を学ぶ上でもいい教材となるし影絵芝居も面白い。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

＜中国の映画「活きる」＞

これも前から観たいと思いながらチャンスがなく、「２００３　朝日ベストテン映画祭」で観たもの。「活きる」は、２００１年１２月から２００２年１１月まで、関西の劇場で公開された外国映画の中で2位に輝いた１９９４年の作品で、カンヌ映画祭で審査員特別賞と主演男優賞を受賞している。

＜監督と二人の主役＞

監督は、１９８７年に鞏俐（コン・リー）主演の「紅いコーリャン」でデビューし、ベルリン映画祭で金熊賞に輝いた張藝謀（チャン・イーモウ）。彼は、陳凱歌（チェン・カイコー）、田壮壮（ティエン・チュアンチュアン）らと並ぶ、いわゆる中国映画「第５世代」の監督の代表格だ。

夫を支え、子供を育てながら、強く活きる女主人公・家珍（チァチェン）を演ずるのは、私の大好きな「さらば、わが愛　覇王別姫」（９３）、「項羽と劉邦　その愛と興亡」（９４）、「始皇帝暗殺」（９８）などで圧倒的な存在感をみせる鞏俐（コン・リー）だ。「活きる」は１９８７年の「紅いコーリャン」でのデビューから７年目の作品だが、１９６５年生ま

れの彼女にとってこの作品は３０才直前の作品になるはずだ。

贅沢な家庭に育ち、サイコロバクチにうつつを抜かし、その挙句、家屋敷を取られてしまい、一文無しになりながら、その後、懸命に活きていく主人公・福貴（フークイ）を演ずるのは、この作品で最優秀男優賞を受賞した葛優（グォ・ヨウ）。どこかで観た顔だと思ったら、「さらば、わが愛　覇王別姫」で、当時中国の北東部を支配していた軍閥のボスでありながら、京劇の良き理解者であった袁世凱を演じていた役者だ。その飄々とした演技がこの映画では特に光っている。

＜中国１９４０年代＞

１９４５年の日本敗戦。そして中国本土では１９４６年以降、国民党と共産党との内戦が始まった。そして、共産党は国民党の蒋介石を台湾に追いやって勝利し、１９４９年中華人民共和国が成立した。奇しくもこの１９４９年は私の生まれた年に当たるから、私の人生も「新中国」の歴史とそのまま重なることになる・・・？

＜中国１９５０年代＞

新国家は建設されたものの戦争時代の「総括」が続く。従来の上流階級や富裕地主は反革命分子というレッテル貼られて糾弾され、処刑された。そして１９５７年、毛沢東の「大躍進運動」が始まった。鉄を増産するため、各家庭からナベ・カマなどの鉄製品が集められた。「家庭からナベ・カマがなくなったら食事をどうするの？」との質問に対する答えは明快。つまり「共同食堂があるから大丈夫」というものだ。すなわち共産国家中国では、食事はすべて国（党）が提供するから、各家庭毎に作る必要はないというわけだ。

＜中国１９６０年代＞

中国共産党では毛沢東の「神格化」が進められ、１９６６年からは「文化大革命」が始まった。「造反有理」をスローガンとし、「毛沢東語録」を手に、「紅衛兵」が街中をのし歩いた。「壁新聞」がはられ、従来の知識人達は次々と糾弾され、「自己批判」を余儀なくされた。この映画でも紅衛兵による次のような悲劇が描かれている。

すなわち、二人の愛する一人娘の鳳霞（フォンシア）が出産するについて、病院に医者がいないのだ。それはなぜか？これについても白衣を着た若い看護学生の答えは明快だ。つまり産婦人科の主任医師は「反動分子」として糾弾されているからだ。こんな理不尽な紅衛兵運動（文化大革命）は、１９７６年に毛沢東が死亡するまで続き、江青を中心とした「４人組」が逮捕されたことによって、新中国の革命第一期の時代が終わるのだ。

＜歴史の激動の中、福貴と家珍は＞

このような新中国の激動の時代の中、福貴と家珍の二人は、娘（鳳霞）と息子（有慶）らと共に懸命に活きて行く。このストーリーの中で心に残るいくつかのエピソードやシーンを紹介しよう。

①中国影絵芝居

サイコロバクチで家屋敷を失った福貴は、バクチに勝ってこの家屋敷の新たな主となった龍二（ロンアル）に借金を頼むが、断られ、そのかわりに龍二から影絵芝居の道具をもらった。龍二から、「影絵芝居は賤しい仕事だと思われているが、食うには困らない」と聞いた福貴は、以降これを自分の天職として懸命に活きて行く。この中国の影絵芝居をこの映画によって見ることができたのは大きな収獲だ。

②子供の名前

バクチから離れられない福貴に愛想を尽かして、いったんは福貴と別れ、実家で長男有慶（ヨウチン）を産んだ家珍は、福貴が真面目に働いていることを聞き及び、福貴の元へ帰ってきた。そこで、「息子の名前は何だ？」と聞く福貴に対して、『不賭』（ブドウ）と答える家珍。観客から思わず笑いがもれる、いいシーンだ。

③国共内戦

影絵芝居で巡業の旅を続ける福貴は突然国民党の部隊に襲われ、その部隊を手伝わされる羽目に。しかしこの部隊も共産党軍に攻撃され、今度は共産党軍の兵士達に影絵芝居を見せることになった。このように国共内戦の中でも、影絵芝居が福貴の生命を守ってくれたのだ。

④地主階級の糾弾

生命からがら共産軍から逃げのびて、家珍の元へ帰ってきた福貴。ここで福貴は、サイコロバクチで福貴から家屋敷を取りあげてリッチな生活を楽しんでいた龍二が、地主階級と認定されたため、公開処刑を受ける姿を見ることになった。もし、福貴がバクチに負けてなくて、地主階級のままだったら・・・。「人間万事塞翁が馬」ということを改めて考えさせる事件だ。

⑤共同食堂

毛沢東が提唱した「大躍進運動」に協力して、ナベ・カマを供してしまった結果、各家庭では食事ができなくなり、「共同食堂」で、多くの人たちが食事をするシーンがある。共産主義国家中国の「共同食堂」とはこういうものだ、ということがよく分かった。何とも奇妙な感じ。

⑥ギョウザ

福貴と家珍の息子有慶が、車の事故で死亡した。この悲しいストーリーの中では、家珍が作るギョウザが一役買っている。なお、その内容は映画を観てのお楽しみに・・・。

⑦結婚式

口の聞けない娘鳳霞の夫となるのは、３代続いた工場の労働者階級の二喜（アルシー）。彼は毛沢東思想の信奉者であり、心酔者だ。毛沢東の写真をバックとして、毛沢東語録を胸に、結婚祝いの写真撮影。そしてそこで歌われる歌は毛沢東の讃歌だ。このような祝福の中で二人は新たな家庭をもったが、家珍は子供が生まれたら、毎年一回子供の写真を撮ることを二喜に約束させた。

⑧「走資派」

ナベ・カマの供出を勧め、毛沢東の写真を飾って結婚式を祝ってくれた福貴と家珍の住む町の町長は毛沢東思想に忠実だったはずだ。しかし、この町長もいつしか「走資派」とされていた。激動の時代の流れとはいえ、何とも理不尽な話だ。しかし、このように現実に描かれた姿を見ると、つい怒りがこみ上げてきてしまう。

⑨お産と紅衛兵

そして鳳霞のお産。反動分子の産婦人科の医者は病院にいない。そのかわりに白衣を着た看護学生の紅衛兵がお産の手助けだ。赤ちゃんは無事に生まれたが、その後の処置が悪く、結局鳳霞は出血が止まらずに死亡してしまう。毛沢東思想と医学の知識やお産のテクニックと何の関係があるというのか？

⑩孫を囲み二人で過ごす老夫婦

愛する息子と娘を二人とも失いながらも、孫の「マントウ」と共に幸福に暮らす福貴と家珍。息子有慶と娘鳳霞のお墓には、有慶の大好きなギョウザと毎年撮った鳳霞と二喜の息子マントウの写真が飾られていた。

＜まとめ＞

どんなに時代が変わろうとも、またどんなに災難が降りかかってこようとも、福貴と家珍の二人は懸命に活きていた。特に涙をボロボロ流すわけではないが、人間の価値や人間の生き方の意味を示してくれる素晴らしい映画だ。

２００３（平成１５）年3月４日記

熱血弁護士

坂和章平

中国映画を語る〈3〉

（さかわ・しょうへい）
１９４９年１月愛媛県松山市生まれ、大阪大学法学部卒。都市開発に関わる訴訟を数多く手がけ、日本都市計画学会「石川賞」、同年に日本不動産学会「実務著作賞」を受賞。『坂和的中国電影大観』（２００４年）、『ナニワのオッチャン弁護士、映画を斬る！』シリーズをはじめ映画に関する著書多数。ＮＰＯ大阪府日中友好協会会員。

激動の中国が活きる夫婦が示す人間の価値

１９４０年～60年代の激動の中国で生き抜く夫婦を描いた、張芸謀監督の感動的な作品。

カンヌ映画祭で審査員特別賞と主演男優賞を受賞、「２００３朝日ベスト映画祭」（朝日新聞社ほか主催）の外国映画部門でも2位に輝いた。

夫を支え、子供を育てながら、強く活きる女主人公・家珍を演じるのは私の大好きな鞏俐。一方、バクチで一文無しになりながら、その後、懸命に活きる夫・福貴を演じるのは、この作品で最優秀男優賞を受賞した葛優で、飄々とした演技が光っている。

福貴に愛想を尽かして、実家で長男有慶を産んだ家珍だが、福貴が真面目に働いていると聞いて、再び福貴の元へ帰ってくる。「息子の名前は何だ？」と聞く福貴に対して、「不賭」と答える家珍。観客から思わず笑いがもれる、いいシーンだ。

影絵芝居巡業の旅を続ける福貴は国民党の部隊に襲われ、その部隊を手伝わされる羽目に。しかし、この部隊も共産党軍に攻撃され、今度は共産党軍の兵士達に影絵芝居を見せることに。国共内戦の中でも、影絵芝居が福貴の命を守ってくれたのだ。福貴が命からがら家珍の元へ帰ると、福貴から家屋敷を取りあげリッチな生活を楽しんでいたはずの龍二が地主階級と認定され、公開処刑を受ける姿を見ることになった。もしバクチに勝って地主階級のままだったら…「人間万事塞翁が馬」を感じさせられる。

どんなに時代が変わろうとも、またどんなに災難が降りかかってこようとも懸命に活きる福貴と家珍の姿は、観る者に人間の価値や人間の生き方の意味を示してくれる。

息子の有慶が亡くなるストーリーには家珍が作るギョウザが一役買っている。その内容は映画を観てのお楽しみに。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

活きる

原題：活着
出演：葛優、鞏俐
監督：張芸謀
製作年：1994 年
DVD 販売元：ハピネット・ピクチャーズ
発売年：2003 年
時間：131 分